



昼 休 み

緑濃い木立ちをぬって、思いがけず、管楽器の軽快なメロディが流れてくる。木もれ陽の中に、金モールの楽団が半円をつくり、タクトに合せリズムカルに動いている。知らず知らず足を運び、芝生に腰をおろす。目を閉じ、旋律に身をゆだねる。心に様々な想いが現れては消えてゆく。

……ふと気付くと、演奏がやみ、陽射しが心なし斜き、初夏の短い昼休みは終ろうとしていた。

7月のおもな行事

- 1日 事業所統計調査調査日
- 1～9日 昭和56年度第2回定例県議会(6月29日から)
- 1～31日 茨城県統計グラフコンクール作品募集(9月9日締切)
- 2～3日 昭和56年度 毎月勤労統計調査地方別事務打合せ会(大洗町)
- 2～10日 事業所統計調査調査票の取集
- 13～31日 事業所統計調査於市町村調査票の審査・産業格付け
- 14～15日 社会生活基本調査地方別事務打合せ会(群馬県)
- 16～17, 20～21日 昭和56年度毎月勤労統計調査特別調査統計調査員事務打合せ会(水戸市, 鹿島町, 土浦市, 下館市)
- 20日 昭和56年度茨城県消費実態調査市町村事務打合せ会(水戸市)
- 28～29日 昭和56年度地域メッシュ統計及び社会人口統計体系に関する地方別事務打合せ会(静岡県)

「独り言」……………

統計調査の審査・調整という仕事を命じられて約一年半になる。

統計を作成するための調査の設計は、本来、極めて技術的であり、専門的な領域である。社会・経済の現状を把握する一方法として、その客観性と有効性が容認された統計調査は、関係行政機関において、所掌する行政の執行上欠くことのできないものとして採用されている。行政がその領域を次第に拡大し、国民生活のあらゆる分野に関与する現代においては、現実を的確に把握し、将来への適切な展望なくして複雑専門化した行政施策の適正な執行を行うことができないからである。だから、統計調査も、行政各分野に応じ、国民生活を形成する各行動主体に対し、あらゆる面から、その行動の実態を把握しようとする。国の昭和56年度予算において、統計関係予算は約200億円にも及ぶものとなっている。

わが国の統計制度は、いわゆる分散型統計機構によっており、各省庁がその必要とする統計調査をそれぞれに実施するしくみである。これによる統計調査の重複や記入者負担の過重を排除し、全体として調和のとれた統計の体系を築き上げるために、総合調整機関としての行政管理庁統計主幹が置かれている。

役所の機構の中における総合調整部門というものは、一般的にいって、その立場が微妙である。それぞれに分担と責任を有する機関があり、それらの機関相互の利害が衝突する事態が生じた場合、一方に正当性を認めることのみでも、足して二で割るのみでも、その調整能力を誰も評価してくれない。もし調整部門の一つ一つの判断に論理的現実的な正当性がなく、信頼性が一旦失われることがあれば、その調整部門は完全に存在意義を失ったものになってしまう。

統計調査の審査・調整のむずかしさは、言葉を変えていえば、結局は判断の正当性・説得性をどこまで持続できるかということである。このためには、統計調査の設計の専門技術性、作成機関と関係機関が実施する他の統計調査との重複排除、対象者における記入者負担の程度、実査を担当する統計調査員等難易度という要素について、誤まりの

ない判断が要請されざるを得ない。それぞれについて、適正な結論を求め得ないならば、その存在意義は失われる。年度間で500件前後の統計調査の一つ一つについて、このことが求められているのである。

この厳しさと重さは、時に耐え難たい苦痛の意識を生み出す。もちろん、これらの要素は、当該統計調査の企画者である機関において第一義的に判断され、選択されなければならない。審査・調整機関としては、その判断と選択に誤りがないかどうかを的確に見極められるかどうかという問題である。もし、判断の基礎とすべき要素の一つに見落としがあるとすれば、その責任を到底まぬがれ得ないところである。

私は、若い頃、よく冗談まじりに、理数系が出来たら、自分の人生の選択が違ったかもしれないのと言った。近頃またそれを言うようになった。若い頃は、それでも最も良い選択ができたという満足感をこめて。近頃は、深いため息とともに、思いがけない職責をふりかえりつつ。統計調査の審査調整という日常業務の処理に当たり、どれだけ適切な結論を得ているのだろうかという不安感を拭うことが出来ないことは、結局、みずからの力量の問題に帰さなければならないのだからけれども。

* * *

昨年九月、全国統計協会連合会の三十周年を記念する祝賀会が盛大に開かれ、その席上で有澤廣己先生の御挨拶を聞いた。約四年の空白のあとで拝見した先生は、以前と変らない尊厳とあたたかさを全身から薫らせていられた。お話の口調は、先生特有の明解であたたかみのあふれたものであり、懐かしさで聞くうちに、深い感動に心を満たされた。お話自体は、祝賀にふさわしい全統連の歴史であり、その初心であった。その初心とは、全統連発足の目的である地方統計人の統計への熱情と連帯であり、「統計精神の高揚」ということであった。しかし、私の心をしめつけたのは、先生の統計に対する情熱であり、統計人に対するやさしさと愛情であった。私は、第二十五回から第二十七回の全国統計大会に参画する機会があって、その都度、先生の常に感銘深い大会挨拶を聞くことができた。言葉はそれぞ

元行政管理庁 堀江 侃
 行政管理局統計審査官

れに違って、変らない基調は、地味で馴れることの少ない統計調査に携わる統計人への心のこもった共感と励ましであった。ある時には、こう述べておられる。「統計は、その性質上、決して華やかさをもちません。いわんや、その統計を作る者の労苦に、国民の注目と喝采が集まることは期待できないでしょう。」「統計は、国民一般の協力なくしては作られ得ないにもかかわらず、統計の必要性がいよいよ高まる中であって、一部の統計調査に対する無関心、いよゝ忌避の傾向さえあらわれていることは、真に悲しむべきことであります。それにも拘らず、統計の需要に応じて、迅速に正確な統計を提供するという統計関係者の使命は、今日、皆さんの酬られること少ない献身的な努力と忍耐によって、辛くも達成し得ていることを、私は、ここに声を張りあげて断言いたしたい。」もうこれ以上の引用は無用であろう。統計作成の現状をこれ以上に厳しく認識することが出来るだろうか。統計人に対するこれ以上の共感と激励を誰が云ったのだろうか。先生は、「心に共に燃えている統計への情熱」と「統計人としての高貴な精神」という素晴らしい言葉を使っておられる。この言葉こそ、先生の統計に対するお気持ちの全てなのではないのかと受けとめる。

* * *

判断し、処理しなければならぬ業務は山積している。その一つ一つが全体としての統計を形成し、統計行政の枠に組み入れられて行く。適正な判断とは何なのかを模索し続けると、疲労と焦心の想いのみが残ってしまう。ふと想い出すのは、先生の言葉である。たとえそれが与えられた仕事であり、だから困難さも数倍加するかもしれないけれども、その責任、正面から対応すべき課題が大きく、かつ多いからこそ、純粋に情熱を燃やすべきではないのかと自答する。しかし、このことは、自明のことであり、自問すること自体が不謹慎なものと自戒することすらある。なぜならば、最も困難であり、かつ、統計作成上の根幹である実査を担当する統計関係者は、正に先生の云われる統計への情熱、統計人としての高貴な精神をしっかりと自覚し、酬われない努力を払っていられるのではないかと思ひ知らされる時があるからである。出張して実情の説明や意見を

うかがうことがある場合、卒直で厳しい批判を受けるのが通例である。国の統計調査の設計段階と現実と乖離を思い知るのであるが、しかし、その厳しさの根底にあるものは、統計への情熱と一層の進歩のための為し得る貢献の精神のほかにはないと考えるのである。だから、しみじみと考えるのである。「われわれ皆のところに燃えている統計への熱情」を共有し得る者の一人となり得るならば、それは大きな満足感でなければならないと。

統計調査環境の悪化、統計調査員確保の困難性、調査協力度の低下及至拒否傾向の増加、体制予算を含めた統計調査の効率化の要請等々統計行政をめぐって対応すべき課題は、厳しく困難である。結局、最後に確実に統計の一層の改善発達を支えるものは、統計人個々の胸に燃える情熱と「献身的な努力と忍耐」なのかもしれない。

* * *

結局のところ、私は、何を言おうとしたのだろうか。重荷と不安と焦心に耐えかねて、そのよりどころを求めて、ひとりよがりを書いたのだろうか。ただ、このことだけ確信をもって言い得るのは、どの言葉も、誰はばかすることのない独り言だということである。

(堀江侃氏は、昭和56年4月1日付行政管理庁行政監察局監察官に異動されています。)